

平成22年6月12日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19560657

研究課題名（和文） パトリック・ゲデスの都市論における女性の生活像

研究課題名（英文） The Image of Women's life in the Theory of City Planning by Patrick Geddes

研究代表者

黒田 智子（KURODA TOMOKO）

武庫川女子大学短期大学部・生活造形学科・准教授

研究者番号：10223968

研究成果の概要（和文）：

『進化する都市』（1915）における女性の生活像と、女性の生活を現状から将来像へと導く都市計画についての記述を抽出し、市民・国民の生活全体の中に位置づける。また、グラスゴー・ストラスクライド大学ゲデス文庫において、エジンバラにおける観察塔(Outlook Tower)を拠点とする彼の理論と実践について、女性の参加に関連のあるものを収集した。それらを、ゲデスが描く理想の女性像、活動参加者としての女性、都市問題に置ける生活主体の3点を視点に分析する。

研究成果の概要（英文）：

I surveyed the description of the image of women's life and the city planning, which makes the original condition better to the future one, in 'Cities in Revolution' (1915), trying to give their life the position in the life of citizens or nations. On the other hand, I gathered the materials about his theory and practice relating to the women's participation mainly based in Outlook Tower, in Patrick Geddes archive in University of Strathclyde in Glasgow. I examined them from the view point of the ideal image of Woman, the way of their participation, and their role as citizens.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：建築学

科研費の分科・細目：建築論

キーワード：都市の生命、女性の生活像、Thinking-Machine、Outlook Tower(観察塔)、仮面劇

1. 研究開始当初の背景

生命をもった有機体をモデルとして都市を捉えたパトリック・ゲデス(英、1854-1932)の『進化する都市』(1915)は、原著:『Cities in Evolution』については近代都市論の基本文献として、現在まで重版(1945, 1971, 1997)・増刷されている。日本では、初版から67年後に翻訳・紹介されたが、現在まで彼の都市論についての目立った研究はなされていない。訳者・西村一郎は、出版当時(1982)、ゲデスの提唱する都市計画の方法が、市民主体かつ実態調査重視であるところに今日的意義を認めている。一方、ゲデスの都市論は、西洋文明批判的性格が強いが故に、西洋文明に通じていないものには難解であることを指摘している。(パトリック・ゲデス、進化する都市、鹿島出版会、1982、pp. 352)

本研究では、ゲデスの文明批判的性格を彼独自の歴史観に依ると捉える。ゲデスの歴史観とは、西洋における古代以来の自治都市の系譜の上に都市の理想像を位置づけるものである。それは同時に彼の描く都市進化の過程であり、したがって市民主体・調査重視の都市計画は、この都市の理想像に向かうための方法なのである。本研究は、古代以来の壮大な進化過程のうち、ゲデスが問題とした都市の現状から、彼が提案した計画によって実現すると想定された近未来までを対象とする。

生物学者、都市改良家、都市計画家、社会学者として多彩な活動をしたゲデスの残した膨大な文献・資料は、ストラスクライド大学(グラスゴー/スコットランド)を中心に

分析・整理され、これに並行して多くの研究論文が発表されている。英語圏における、社会学および都市計画・設計の分野では、生物学から政治・歴史・哲学・宗教・芸術にいたるゲデスの幅広い着想の源泉に遡り、そこから彼の理論の発展過程を分析したもの、あるいはゲデスの多岐に渡る理論と実践を対比させて論じたものが主流である。前者は、社会学の立場からゲデスの諸理論の発展を実証的に記述し、詳細な伝記を著わしたヘレン・メラー(英、1941-)、後者は、ゲデスの残した膨大な資料の整理に携わり、都市・建築の歴史・意匠の分野から、ゲデスの業績を体系的に考察したフォルカー・M・ウェルター(米、1963-)の一連の研究に代表される。

これらの研究の動機または関心は2点に集約できる。第一は、ゲデスが人間と他の生物を峻別する証として、人間の内面性や精神性を重視し、それ故に、生命体をモデルに都市を扱う際も、公衆衛生から都市美・芸術までを対象とした点である。ゲデスの複眼的視野からの社会改良や都市計画への取り組みは、一般大衆ではなく、政治家や建築家のような専門家の思考を刺激するものだった。メラーは、このことについて、次のように述べている。「ゲデスは、自分の立てた仮説や偏見から自由だったわけではないが、—(省略)—彼のジェネラリストとしてのアプローチは、同時代の人々が、意味を持ち、役に立つ物事について考える自由をもたらした。」

(Helen MELLER, Patrick Geddes- Social Evolutionist and City Planner, Routledge, 1990, pp. 289) 多様な立場からの機能的要

求を満たすだけでなく人間性や芸術性を供えるという都市の理想は、近代都市計画の未だ果たされない課題である以上、本研究もゲデスのこの姿勢を肯定する立場をとる。

第二は、ゲデスが、Thinking-Machine と名づけた独自の図式的思考方法を考案し、改良を加えながら、自らの論の構想と展開のために実際に活用した点である。彼がこの思考方法を、論文や講演で公にすることが少なかったのは、複雑な都市の進化の様態を複数の視点から把握するための道具と見なしていたためであろう。しかし、ゲデスが書き残した図式は、それ自体が必然的に彼の思考や理論の図式化、定式化であるともいえる。このことは、研究者がゲデスの都市計画を理論と実践の視点から分析・評価するとき、人間や都市一般についてのゲデスの抽象概念と、現実に個別の条件下で彼がおこなった具体的提案との対比という立場を取らせやすい。同時にそれは、ゲデスが都市計画は本質的に市民主体であると強調した事実や、主体となるはずの市民を、すでに分析の段階で排除しやすくする。これを避けるため、本研究は、ゲデスの都市論における市民の環境への主体性を重視する。そして都市に対して人間が行う思索・行動の一般的傾向ではなく、市民が都市を舞台に展開する都市生活・活動の具体的様態という視点からゲデスの『進化する都市』の分析・評価を試みる。

2. 研究の目的

ゲデスは、政治家、都市計画家、建築家などの専門家だけでなく、労働者、女性、子供など都市計画とその実施に対して特別な権力や職能をもたない人々が各々役割分担をして組織的に都市を創造することを理想と

した。特に後者のエネルギーと情熱が欠かせないと考え、彼らをサマースクールや都市博覧会という学習の場によって啓発しようとした。本研究では、そのような市民の中から特に女性を選び、都市計画の策定過程においてゲデスが与えようとした役割を明らかにする。また、女性に取っての都市環境の問題点と計画実施後の問題解決の度合いを分析し、都市の進化の究極に置いてゲデスが措定した理想の都市生活像との対比を行なう。

3. 研究の方法

主要な研究対象は、ゲデスの代表的都市論『進化する都市』(Cities in Evolution, 1915)、ゲデス自身が好例とし、多くの女性が参加した、エジンバラにおける調査と計画(1900-1915)とする。

ゲデスは初版の序で、『進化する都市』は、一般向けであると同時に専門家向けに書いたと述べている。(パトリック・ゲデス、進化する都市、鹿島出版会、1982、pp. 23-24)しかし、体系的なバランスという観点からすれば、本研究の対象である女性の生活像について、記述が不十分な箇所があり、ゲデス自身が既刊著書の参照をすすめている。また、限られた頁に掲載しているために都市計画図や建築図面の文字が読み取れず、内容把握に限界がある箇所がある。それらを補い、適切な資料を得るためには、スコットランドにおける現地調査が必要である。グラスゴーのストラスクライド大学文献資料室パトリック・ゲデス文庫は、彼の論文およびその草稿、地図およびそのエスキース・スケッチなど、まとまった資料を有している。2000年にコンピュータ化が終了し、ある程度の項目まではインターネット上で検索可能である。また、

外国人も含めて外部者に開かれ、閲覧・複写が可能であるため、主に、資料収集を行なう。

4. 研究成果

(1) 平成 19 年度

①『進化する都市』(1915)における女性の生活像についての記述と、女性の生活を現状から将来像へと導く都市計画についての記述を抽出した。それらを、市民さらには国民の生活全体の中に位置づけた。これらを、都市の調査、計画の策定および実施段階における、専門家や他の市民と女性との役割分担を視点に考察した。

②グラスゴー・ストラスクライド大学ゲデス文庫における文献資料調査と、エジンバラに於けるフィールド・サーヴェイ(2007年9月4日～25日)を行った。文献資料は、エジンバラを中心としたゲデスの活動記録(1900年～1915年に限定)において、都市を進化する生命体と捉えるゲデスの論理展開または思考方法を示す図式(Thinking Machine)、多数の女性の協力を得たか、または女性の生活像または理想像が表現されたもの(仮面劇、サマースクールなど)、旧市街のロイヤル・ストリート周辺においてゲデスが提案したスラム改善案の図面・スケッチを中心とした。

③以上から、女性の自発性を促し、都市環境を創る潜在能力を発揮させるためのゲデスの工夫について分析した。計画内容の長所・短所を生活者側が判断するための一助となるような成果を目指し考察を進めた。

(2) 平成 20 年度

ゲデスのエジンバラにおける活動拠点・観察塔(Outlook Tower)における実践活動の内容を示す資料として、以下を収集した。まず、仮面劇(1912年、エジンバラでの上演作品に

関して)については、

- ① ゲデスによる脚本とその立案過程及び草稿
- ② 演出・出演で協力・参加した人々(特に女性)とゲデスとの書簡
- ③ 仮面劇についてのパンフレット、ポスター、新聞記事
- ④ 舞台のための諸場面のスケッチ、写真、パンフレット

また、ゲデスの活動のもう一つの拠点であったラムゼイガーデンについての資料とそれが掲載された古地図を、スコットランド国立図書館およびエジンバラの古地図専門店に収集した。ゲデスの活動の拠点には、観察塔のみならず、エジンバラ大学およびゲデスとその家族・弟子たちが住んだラムゼイガーデンがある。特に、ロイヤルマイル(エジンバラ旧市街のメイン・ストリート)の始点であるエジンバラ城に最も近接したラムゼイガーデン(現在はエジンバラ旧市街屈指の高級住宅街)は、ゲデスが活動をはじめた頃はスラムの一角を形成していた。

本年度の調査で、ラムゼイガーデンは、17世紀に詩人が建設したヴィラが核となり、画家であった息子の代に増築されたものであることが分かった。ラムゼイガーデンの成立過程は、近代にスラム化した中世の街並において、特にゲデスがラムゼイガーデンを自らの居住の場所としたことと関係があるのではないかと考える。ゲデスは、環境と生活の関係を精神性も含めて追求すると共に、文学を愛し詩人でもあったからである。そこで、その成立過程を示す古地図を中心に収集をおこなった。

(3) 平成 21 年度

調査・見学： ゲデスの Outlook Tower に影

響を受けたと考えられる Dublin Castle の博物館としての再生とそれに伴う周辺地域の再開発について調査・見学。さらに、ゲデスの戯曲：Masque of Ancient Learning (1912) の内容に影響を与えた可能性がある Hill of Tara の見学をおこなった。

分析： 生活と環境が相互に良い影響を与え合って進化する関係を持続することが、都市が生命を持つことであると定義づけたゲデスの生命観は、精神性に及ぶ点に特徴がある。その精神性は、歴史・文学・宗教などを横断するものである。ゲデスは、都市計画家であり、生物学者であると同時に、詩人でもあった。ゲデスの詩人としての感覚や文学的素養が、彼が組織した仮面劇の活動に、① 戯曲の内容、② 戯曲の創作過程 ③ 参加者のネットワークづくり、④ 参加者による上演方法 ⑤ 上演の場所・環境 に欠かせなかったことを、収集資料（2009 年度を含む）をもとに分析。また、それぞれの局面において、女性がどのように関わっていたかを、主として、理想の女性像と、活動参加者としての女性と、都市問題における生活主体としての女性の3つの視点から考察を進めた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒田 智子 (KURODA TOMOKO)
武庫川女子大学短期大学部・
生活造形学科・准教授

研究者番号：10223968

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：